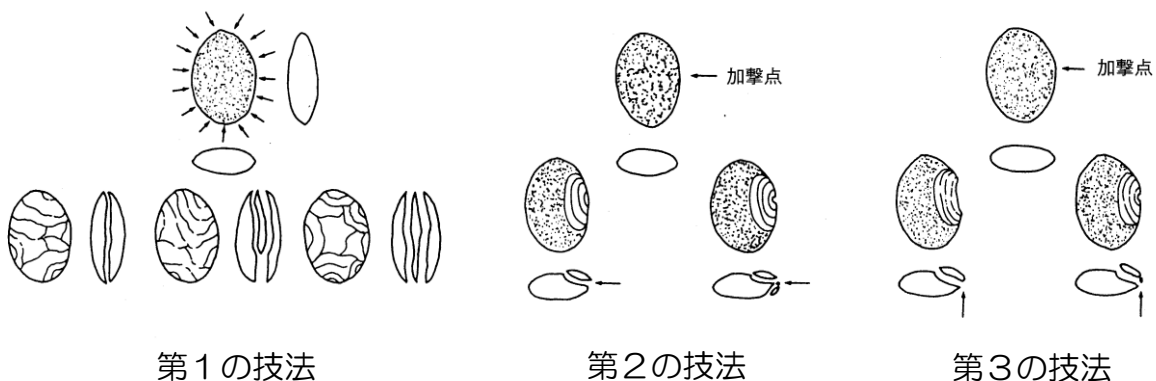


縄文時代の粟田遺跡

縄文時代、人々は粟田地域から約2km北方の御経塚^{おきょうづか}やおしの^{おしの}地域にムラを作り生活していました。縄文人は、粟田地域にムラを構えることはしませんでした。縄文時代の後・晩期にはこの地で土掘り道具として使用する石器の打製石斧^{だせいせきふ}の素材を採取していました。

打製石斧の素材を採取した痕跡は、石礫^{いしれき}が多数露出^{ろしゅつ}する箇所で見つかりました。縄文人は、露出する石礫の中から大きい石^{ほがん}（母岩）を選んで、そこに打撃を加えて打製石斧の素材となる剥片^{はくへん}を取得しました。

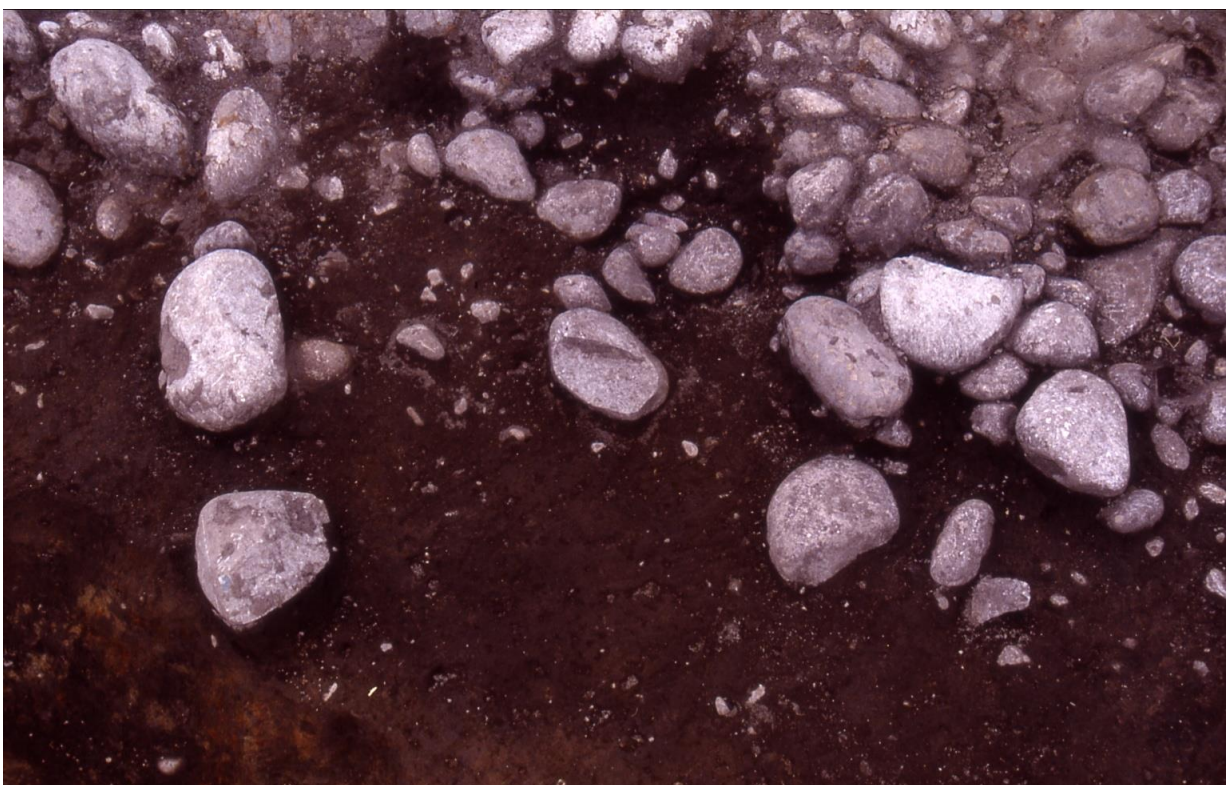
打製石斧の素材の採取については、母岩の観察から、3種類の採取技法を確認することができます。第1の技法^{ぎほう}は、母岩の側縁^{そくえん}を全体に何度も打撃し剥離^{はくり}させる方法です。第2の技法は、母岩の側縁に対して、平行な打撃を一度加える方法です。第3の技法は、母岩の側縁に対して、垂直方向で打撃する方法です。



採取した石は、打製石斧へと加工され、縄文人の大切な道具として使われました。縄文時代の大きな集落遺跡である御経塚遺跡にも数多くの打製石斧が見つかっています。これらの石斧も粟田遺跡から採取されたものかもしれません。



石礫露出面



母岩出土状況